

北国の四季

川原六十夫

(作業療法ジャーナルに掲載, 2005年)

手足が動かないとか、体温調節ができないとか、そんな障害とともに暮らしていると、季節の移り変わりがよりはっきりと感じられるものらしい。私のような北国の住人にとっては殊更のことなのかもしれない。

冬。とにかく外出が大変だ。一日で50センチ以上も雪が積もることがあるし、大寒の頃にはマイナス20度近くまで冷え込む朝もある。雪で車いすが進まないという前に、まず身支度にとわなでも時間がかかる。何枚もの衣類を身にまとわなければ、とても氷点下の世界へ出て行くことなどできない。そんな根性はない。そもそも障害を持つ前から寒さは大の苦手なのだ。それに一度体が冷えてしまうと半日近くは元に戻らない。保温性が高いという素材でできた衣類を何枚も重ね着し、その上にモコモコのダウンジャケットを着込む。ただでさえ太めの体がさらに着ぶくれして、車いすから大きくはみ出してしまう。家内はその姿を見て、珍獣ヒメダルマなどと言ってからかう。マフラーと帽子も欠かせない。それでも寒い時は屋外作業用の目出し帽をかぶる。なんだかとっても怪しい。でも、格好などは気にしてられない。

そんな調子だから、身繕いだけでも一時間くらいかかってしまう。なんといっても私はすべてが介助なのだ。自分で何かするわけでもないのに、ものぐさな私はこれだけで気が萎えてしまいそうになる。

雪が多く降った日はさらに慌ただしい。除雪をしなければ玄関の扉は開かないし、クルマも出入りできない。ふわふわの粉雪ならまだいいが、除雪車が来た後は特に大変。溶けたり凍ったりを繰り返した重い雪の固まりをドカッと置いていくからだ。除雪車は夜明け前にやって来る。家内は私の身支度を整え終えると、休む間もなく除雪をしに外へ出ていく。そんな時でも彼女は「雪ってなんとなくワクワクするね。」などと呑気なことを言いながら、鼻歌交じりで雪をはね上げている。しばみかけていた私の気持ちもちが、また膨らんでくる。

春。日に日に陽射しが強くなり、雪解けが進む。気温はまだまだ低いけど、外出は格段にしやすくなる。まず、遠くの町で暮らす祖母に会いに行ったり、家内が懇意にしている花卉農家を訪ねてみたりする。4月に入ると雪もほとんどの姿を消し、いよいよ春らしくなってくる。毎年この頃になると、友人たちから「もう少し暖かくなったら一緒に遊びに行こう。」とお声が

かる。みんなこの季節を心待ちにしていたんだなああと微笑ましくなる。

連休の頃、ようやく桜前線がやってくる。桜の木の下でジンギスカン鍋を囲むのがこちらの花見だ。ただ、自分はこの時期に体調を崩すことがよくあるので、あまり浮かれてばかりもいられない。家内が庭の植物に手をかけ始める。春の草花たちが競い合うようにして一斉に花開かせる日も近い。これは決して大袈裟ではなく、まさに咲き乱れるという感じだ。そうなると、冬の間少し寂しそうに見えた電動車いすの出番が増えてくる。バッテリーやタイヤをチェックしておき、風の穏やかな日を選んで外に踏み出してみる。しばらくぶりに目にする自分の街の風景。緑が多い。道行く人もみんな春を迎えて嬉しそうだ。ほんのひと冬ご無沙汰しただけなのに、見慣れた建物が取り壊されていたり、結構様変わりしてしまっていることもある。帰宅後、その日目にしたことを家内に話す。「駅前通り、相変わらずデコポコがひどかった。商店街のラーメン屋、どうやら店仕舞いしちゃったらしいよ。公園の隣りの家の犬は、また今日も寝てた。いったい、いつ起きるのかなあ。」他愛もない報告を家内はいつも楽しそうに聞いている。

夏。抜けるような青空に映える木々や草むらの緑、カラッとした空気。北海道の夏は格別だ。体調がいいから気分もいい。いや、気分がいいから体調がいいのかもしれない。

そんな夏のある日、散歩に出かけた時のこと。いつものように電動車いすに乗り、近所の公園へと向かった。公園の入り口まであとひと息というところで、突然降り出した大粒の雨。すぐに向きを変え引き返そうとしたが、雨は激しさを増すばかり。こんな時、慌ててもろくなことではないと覚悟を決め、道路脇の木陰に車いすを停めた。雨粒の跳ね上がる路面を眺めていると、後方から勢いよく走り寄る足音が聞こえてきた。つい先程まではあんなに晴れ間が広がっていたのだ。傘など持たずに家を出て、この雨に出くわしたのだろうか。いかにも夏らしい光景ではないか。などと物思いにふけているうちに、足音はどんどん近づいて来て車いすの背後でピタリと止まった。「これ、使ってください。」という可愛らしい声に振り返ると、小学校低学年ぐらいの日焼けした女の子が傘を差し出している。その傍らにはたぶん弟なのだろう、小さな男の子が立っていた。二人とも黄色い長靴を履いている。突然の呼びかけに心の準備などまるでできていなかった私は、幼い姉弟を相手に思わず「えっ、あっ、いえ、すぐ近くだから結構です。」などとなんとも気の利かない受け答えをしてしまった。遠慮したのではない。ただ、びっくりしていただけなのだ。礼を言う間もなく二人は雨の中に消えた。ほどなく嘘のように雨は上がり、再び眩しい太陽と青空が顔を出したので私も帰路についたが、頭のないか後は後悔の念でいっぱいだった。手が利かないから傘が使えないということを引きちんと説明す

るべきだったなあ。家まで傘を持って付いてきてほしいと頼んだってよかったのかもしれないし。またどこかで困っている人を見かけた時、同じように声をかけてくれるだろうか。まったく修行が足りんなあ。そんな私ではあったが、心持ちは実に清清としていた。今度あの子たちに会ったら、こちらから声をかけよう。そして電動車いすでクルクル回ってみせてあげようかな。

こんな出会いも気軽に外に出られる季節ならでは。しかし、北の大地に夏は長居してくれない。ジグザグ進む車いすの脇を急ぎ足で通り過ぎていく。

秋。お盆の頃には風が冷たく感じられるようになり、朝晩の気温がぐっと下がってくる。もうシャツ一枚という身軽な格好では外に出られない。秋刀魚漁のニュースが流れるようになると既に秋の気配だ。ついこの間までフル稼働していた扇風機を押し入れに片づけ、代わりにしまいであった暖房器具を取り出す。

この時期、何も予定のない休日には、家内と二人でよくドライブに出かける。走るのもっぱら郊外の田舎道だ。田畑のなかを抜け、農家の直売所に秋の恵みを求めに行ったり、行きつけの店で食事をしたりする。「よしっ、次の交差点、右に行ってみよう。」決まっても突如、私が言い出す。何がよしなのかと言われても困るのだが、とにかく一度も通ったことのない道を走るとワクワクするのだ。思いつきの当てずっぽう。家内は「えー、帰れなくなったらどーすんの。恐ろしー。」と言って嫌がるが、最近は少し慣れてきたようだ。地図にも載っていないような農道にも随分と詳しくなった。

家内の小さな花壇も少しずつ寂しくなってくる。秋から冬まではあっという間だ。毎年、驚くほど早い。山間では9月にはもう木々が色づき始め、大雪山が冠雪する。それからひと月もすると雪虫が飛び交い、初雪の到来が近いことを告げに来る。その頃にはきっとまた、同じ障害を持つあの友人から「そろそろ冬ごもりに入ります。」という便りが届くんだろうな。

チヨッキンチヨッキンチヨッキンナ

川原六十夫

(作業療法ジャーナルに掲載、2006年)

かゆい。チクチクする。特に耳の縁と襟足のところ。髪の毛が伸びてきたのだ。移乗や移動がままならないがための困りごとのひとつに散髪がある。普通なら都合のいい時に床屋へ行けば済むことなのだが、ところがどっこい我々の場合、そう簡単にはいかない。

受傷後、リハビリ入院を終えて自宅に戻り、しばらくして困ったのが自分の意志とは無関係に伸び続ける髪の毛の処理だった。入院中は病院内の床屋で散髪していたが、退院後はなす術なく伸び放題だったのだ。とにかく伸びた髪の毛先が私のデリケートなお肌を刺激してかゆいことこの上ない。でも自分では掻くことも出来ない。

仕方のないことと辛抱を決め込んでいたが、あまりの鬱陶しさに耐えきれなくなり家内に散髪を頼むことにした。私が記憶に残る床屋での手順、要領などを説明しながら家内が家庭用のハサミで髪を切り進めていくが、おぼつかない手つきの彼女は何とも不安げだ。「もっと切って、もっと」とにかくサッパリしたいという一念で、ろくに確認もせずどんどん切ってもらった。切り終えた後、恐る恐る手鏡を覗き込む。二人で涙流しながらの大笑い。そして、しばし沈黙。その日以来、やはり散髪は本職に任せることにしようということになった。

ただ、当時は車椅子で入店出来るような床屋は近所に一軒もなく、特に私の場合は車椅子からユニット椅子への移乗が容易でないということも大きな妨げだった。最近では珍しくなくなった出張理美容もまだ身近にはなかったし、とにかく車椅子というだけで断られる店も多かった。さほど遠い過去でもないのだが、そういう時代だった。

いろいろと考えてはみたものの良案は浮かばず、結局一時期入院していた大きな町の病院の床屋に行くことにした。ただ散髪をするためだけに一時間近くもかけて出かけて行くのはたいそう面倒なことではあったが、その床屋にはそれなりのメリットがあった。病院内にあるということで、車椅子専用のスペースが用意されていたのだ。といっても別に特別な設備ではない。鏡と洗髪台があるだけでユニット椅子が設置されていないというだけのことだ。だが、そのおかげで車椅子に座ったまま髪を切り、顔剃り、洗髪までしてもらうことが出来たので、私には大変都合がよかったのである。

そこでは、いつも同じ女性の理容師さんが担当してくれた。Sさんという人だ。専用スペー

スとはいうものの、ユニット椅子に腰かける一般の客とは違い、頭部の低い車椅子での理容というのは思いの外大変だ。中腰の状態が続くし、通常よりはるかに時間もかかる。それでもSさんは、いつも笑顔で私を迎えてくれた。

Sさんの仕事で特に印象的なのが顔剃りだった。床屋での顔剃り、それは至福のひとつときだ。経験のある方ならお分かりいただけるだろう。散髪だけなら別に美容院でも事足りるのかもしれないが、これがあるから私の場合はやはり床屋がいい。特にSさんの顔剃りは丁寧さが際立っていた。ゆらゆらと湯気を立てる熱い蒸しタオルで毛穴を広げ、切れ味鋭い剃刀を小気味よく滑らせる。これがプロの仕事なのだという見事な深剃りで、翌日になっても髭をあたる必要がないほどだった。

そんな床屋通いが数年続いた。ところが、いつものように散髪に出向いた春先のある日、レジで会計を終えるとSさんが表情を曇らせて「実は・・・」と切り出した。「私、今月いっぱいここで辞めることになったんです」ええー！寝耳に水とはまさにこのこと。その床屋は中年の男性と女性二人の理容師さんで営業していたのだが、女性二人がともに辞めるという。男性の方はどうやら面倒なことはご免という方針らしく、私を含め手のかかる客はすべて女性二人が対応していた。これからどうしよう。私は慌てたが、すぐにそれよりもSさんに会えなくなるという寂しさの方が強くこみ上げてきた。

帰り道、デパートに立ち寄り、普段はまったく縁のない売り場をウロウロと見て回る。何かSさんに似合いそうなものとあれこれ迷った末に質素なハンカチのセットを選び、リボンをかけてもらった。帰宅後、パソコンに向かい、それに添える手紙を書く。こんな時、プリンターから押し出されてくる無機質な文字は何とも味気ない。それでも代筆ではなく、やはり自分で書きたい。突然の出来事に、お店ではうまく言えなかった感謝の気持ちを小さな郵便に託した。

数日後、Sさんから手紙が届く。とても喜んでくれていた。そして何より私の散髪のことを案じてくれていた。退職の事情とともに個人的なことにも触れられており、いろいろとご苦労が多いようだった。その後、理容師の仕事はされていないそうだが、今でも髭が伸びてくると、Sさんの優しく心地いい剃刀の感触を思い出す。

Sさんがいない病院の床屋に通い続ける気にはなれなかった。どうせなら、これを機に近所の床屋で利用出来そうなところを探そう。新しい店もいくつか出来ているようだし。と思っていたのだが、ちょうど運良くその頃、地元の福祉団体が出張理容サービスの仲介事業を始めたというので、一も二もなく申し込む。

そして約束の日、やって来たのがすぐ近くの商店街に店を構える床屋のご主人Aさんだっ

た。明るく賑やかな人で、すぐにうち解けることが出来た。私より一回り以上も年上だがとても若々しく、関心事が重なるので話が弾む。何より町の情報通だ。集客に悩む地方のありふれた商店街だが、Aさんの店はその人柄故なのだろう、とても繁盛している。とにかくじっとしていることのない人で、本業以外にも商店街の活性化やまちづくり活動など、あちこちに関わっているので相当にご多忙だ。福祉団体の出張理容サービスは財政上の理由から二年ほどであっけなく打ち切りとされてしまったが、そんな中Aさんはその後も店の定休日に利用者の家を回り髪を切っている。

出張理容の日。Aさんは決まっていつも私のところが最初、朝一番にやって来る。別にそうして欲しいと頼んだわけではないのだが、いつのまにかこういうローテーションが出来上がってしまった。地理的に一番回りやすいのだという。Aさんが来る前に必ず家内から言われることがある。顔剃りの時、眉毛の形を整えてもらうようにというのだ。人生も折り返し地点を過ぎる頃になると、眉毛も些かくたびれ気味になってくるものらしい。ここの部分は床屋さんの匙加減で手を入れたり入れなかったりするようなのだが、家内が毎回剃ってもらった方がいいというので自己申告することになっている。ところが、お喋りが過ぎたりして言いそびれてしまうことがよくあるのだ。家内「リピートアフターミー。眉毛の下も剃ってください。はいっ」私「眉毛の下も剃ってください」家内「はい、よく出来ました。アッハッハ」

そうこうしているうちに、仕立ての良さそうな仕事着に身を包んだAさんが賑やかにやって来る。「おはようございまあーす」今日も忙しいそう。部屋に入ると、ひと息つく間もなく床にビニールシートを広げ、その上に車椅子を押し進める。カバンからバリカン、ハサミ、櫛などの商売道具を取り出し、私の首にエプロンの紐を巻き付けると、すぐに不揃いに延びた頭の毛を刈り始める。

絶え間なく手は動かしているが、それ以上に口は動く。Aさんは今日も絶好調だ。髪の毛などあつという間に刈り終わり、顔剃りに移る。私は家内からの指令を忠実に実行するためにタイミングを伺うが、Aさんのお喋りにそうそう切れ目などない。ほんの一瞬、間が空いた。今だっ。「まっ、眉毛の下も剃ってください」「はい、わかりましたー」はあー、よかった。ちゃんと言えて。ツルツルになった顔に床屋の匂いのするクリームをすり込み、全体の体裁を整えて散髪は終了する。後片付けをしながら雑談の続きにもうひとつ花。

「次は再来月だね。また電話ください」私をスッキリサッパリさせ、Aさんは来た時同様に慌ただしく帰っていく。その後ろ姿を見送りながら、Sさんといい、Aさんといい、床屋さんには恵まれているなあと思ってしまう。そういえば最後に散髪してからもう二ヶ月近くになる。そろそろAさんに連絡しよう。